岡山医誌（1997）109，125～127

忘れ得ぬ恩師のこと

川崎医療短期大学
（岡山大学名誉教授）　新　居　志　郎

大学退官は私にとっても人生の一つの区切りである。この機会に，今日に至るまで私によい感化を及ぼして下さった今は亡き三人の恩師について語り，ご恩に謝意を表したい。

吉岡ノブ先生は，小学校一年生のときの私の担任であった。先生を回るその頃の鮮明な思い出は，私が一人の仲好し友達と一緒にしでかした，ちびっ子セクハラ事件である。

初めての工作の時間に鋏を使うので持参するようにとの指示を受けて，町医者の子であった私は，普通の鋏のほかに父の診察室からピカピカ光る医療用の鋏を持ち出し，都合三つも持って得意満面で登校した。

授業の開始が待ち切れず兎に角何かを切ってみたい衝動にかられて，隣りの座席のK子に話をつけて，つまり充分なインフォームドコンセントを得て，彼女の髪の毛を少し切らせて貰った。前の座席の友達も同じことをした。私達の仕草は，丁度その時教室に入ってこられた先生の目にとまることになり，忽ち逆鱗に触れてしまった。鋏を三つとも没収された私は，なすすべもなく，他の生徒の花作りの工作をぼんやりと眺めていた。

やがてK子は自分の作品を作り終え，彼女の鋏をそっと私の前に置いた。私はそれを使って，残り少ない時間で大急ぎで何とか仕上げることができた。数日後教室の後の壁に，鋏なしでは作れなかった筈の私の作品までが展示されているのを見て，何だか妙な気持に見舞われたのを覚えている。

旧制中学に入学と同時に父が他界した。その後母と二人でよく父のお墓参りに出かけたが，そのお寺近くの道路沿いに立つ先生のお家の前で，先生とご挨拶することが度々あった。

阪大入学後間もなく母は乳癌に罹った。専門課程への入学試験を目前にして，母は2回目の手術を阪大で受けた。思えば私にとっても試練の時期であったが，幸にしてこの入試にも合格できた。しかし進学後の夏休みに，母は遂に事切れることになった。

一箇月位は私も母のおむつを換えたであろうか，「どうせ助からないものなら，早く死んでくれた方がよいかもしれない」というやや非情な気持と裏腹に，死の淵にある母の手を握りながら，最後の息を引き取るのを見守っているとき，我ながら涙腺がどうかしたかと思う位，とめどなく涙が溢れ出てくるのを禁じ得なかった。

死直後の悲しみの一時が過ぎて，親戚に知らせるために家を出て，郵便局に向かって50米程歩いた所で，ぱったりと吉岡先生に出くわしたのである。

「お母さんのお具合どうですか」という先生のやさしいお声につられて，「はい元気にしております」と答えてしまった。大変な嘘をついたものである。一瞬どぎまぎした私は，「只今息を引き取りました」と慌てていい直すなり，振り向きざま逃げるようにして先生の前から足早に立ち去った。「あ

れまぁー，あんたも可哀相なことに！」悲鳴にも似た先生のお声が背中の方から聞こえた。その時以降，先生の私への懸念と期待は一層深まったようであった。

無事に医学部を卒業し，インターン終了後の国家試験にも合格して田舎に帰っていた夏のある日，突然先生が私を尋ねてお越しになった。

「お目出度う」先生は一つの紙袋を抱えて，にこやかなお顔で土間に立っていた。私への贈物の，今にも袋の口からこぼれ落ちそうな沢山のパンが，何よりも如実に先生のお気持を表していた。

私達が結婚したとき，その記念写真を先生にお送りした。それから間もなく水茎の跡も麗わしい毛筆のお手紙が届いた。「……。淋しい老人の生活に花が咲いたように思われます。……。もう私もこれで何も御心配申し上げることはありません。……」

吉岡先生にお子様がいなかったわけではない。陸軍士官学校を恩賜の銀時計をいただいて卒業した優秀な坊ちゃんをお持ちの，いわば軍人の母でもあった。

このように私は，先生が脳軟化症で倒れられて，やがてお亡くなりになるその日まで，ご高配をいただくことになった。私にとって先生は，「二十四の瞳」の大石先生と同様に，すばらしい恩師なのである。

次は学部学生の頃からお世話になった関悌四郎先生（公衆衛生学）について話したい。

直接研究上のご指導を受けたというわけでもない。先生が主宰する公衆衛生学教室の一部を間借りして，私共が所属するアルファー会と呼ぶサークル活動に利用していた。

この会は一口でいえば AMDA の学生版のようなもので，その名称には alfalfa という牧草を食べて牛が育つように，医学を民衆のために棒げたいという願いも込められていた。

私達自身が行った主な活動は，大阪市衛生局の支援も得て，ある地域で住民健康検診を実施し，予想以上の成果を収めたこと，石井十次記念愛染園を拠点とする三大学協同の学生セツルメントを設立したこと，原水爆反対運動の支援や，その他全国社医研連を京都の大徳寺に招集したことなどがある。これらの仕事のため，器用でもない私は学部三年次の授業の多くを欠席した。この勉強不足もあって，卒業試験は毎回苦闘の連続であった。

卒試が終了したその日，百々英明君（昨年死亡）に誘われるままに，気乗りのしない私は関先生のお宅を突然訪問することになった。4年間の学部生活を過ごしながら，私が先生のお人柄に本当に親しく触れることになったのはその機会が最初であった。

早速にウイスキーが出されて飲み始めたが，徹夜勉強の連続で消耗していた私の体にはアルコールの回りは頗る早かった。

日頃教室員を「馬鹿，馬鹿」と怒鳴り散らしていた教授を，私は短絡的に単なる暴君と思っていたし，また卒業を目前にして私の神経は幾分いらだちの感があった。このために私の口を突いて出る言葉は，毒舌か，あるいは何となく反抗めいたものであった。さらに，回顧して，自らの学生生活は悔のないものといえるかどうか，地に足をしっかりつけて主体的に学生運動を推進してきたのかどうか，これらが自責の念を伴って幾度となく脳裏に去来し，酔うにつれて私の意気はむしろ鎖沈し，やや自棄的になっていった。

一方，先生は私という人間の大体をお見通しのようであった。「何にも出来ねえことはねえぞ!!　新居君」熱を込めた先生の励ましのお言葉を聞きながら，私の意識は遂に消失した。

後日，私自身の全くの不注意によって卒業式の日を間違え，一日遅れて鳴門を船で

発った。人子一人いない暗い講堂の中で，私は自分の靴音だけを空しく聞いた。卒業式の当日，私の数人の友人達は後で揃って先生のお宅を訪れたらしい。先生は，「君看双眼色　不語似無憂」という詩の書かれた酒盃を用意して，私もまたその場に現れるのをお待ち下さっていたとのことである。

鋭い洞察力を持ち，厳しさと同時に深い愛情を湛えた先生のことが，折にふれてなつかしく，また有難く偲ばれる。

先日岡大医学部のある卒業生に出会ったとき，「先生のウイルス学の講義で，覚えているのは釜洞先生の話だけです」と彼はいった。

釜洞先生（阪大微研所長，阪大総長などを歴任）は，ご自身が新設した部門の長として転出したので，私にとって正味の師弟関係は僅か7年ということになる。にも拘らず，私の研究人生の中で先生程強いインパクトを与えて下さった方は他にはいない。

大学院学生として，研究の第一歩を踏みしめた私のための歓迎会の記憶も未だ生々しい。一次会，二次会は北の新地界隈で行われた。三次会は南の方に出かけていった。先輩諸氏にしたがって，ある建物に入り2階に上がると，暗い部屋の中に一瞬はっと息をのむ光景が現れた。スタンドの明りで浮かび上がって見えたのは，ソファーに腰掛けた男の両膝の上で，頭をこちらにして，右手をだらりと垂れて，仰向けに横たわっている一人の若い女性の姿であった。白いドレスが輝いて見える。何分にもバーは生まれて始めての経験である。龍宮城でも訪れているような気分になった。私達は部屋の一隅に座を占めて，また酒宴を開始した。

やがて，「新居，もうそろそろ挨拶したらどうや」教授に促されて，私は立って挨拶した。「これから研究を始めることになったが，未知のことばかりなので何が出来るか全然分からないし，また自信のある筈もない。ただ精一杯の努力だけはしてみる積りなので，何とぞよろしくお願いする」といった内容である。

拍手が終るや否や，突如予期せぬ事態が起こった。「イヤー！　感激した！　先生抱いて！」というなり，いきなりマダムのK子が釜洞先生に抱きついた。さすがの先生も一瞬驚いたが，「うんうん」とうなずきながら，彼女の両肩を軽く抱えるようにした。

「象牙の塔からこんなに沢山の学者の卵がやってきたことはない。こんな純情な挨拶を聞いたためしがない。何時ものお客とあまりにも違った雰囲気に感激した」という意味のことをマダムはいった。

それから数日内に釜洞先生のスピーカーによって，「新居の挨拶にバーのマダムが感激した」という噂が研究所内に拡がっていった。実の所一番感激したのは，マダムに抱きつかれた先生ご自身であったのだが。

先生の没後，「青雲」という題の遺文集が刊行された。丁度私が岡大に赴任した頃であり，当時の岡大医学部長・稲臣先生（現名誉教授）もそれにご寄稿下さった。その一文の内容によると，終戦後間もなく中支九江の陸軍病院でおられた稲臣先生は，別の旅団での検疫の出張を命ぜられ，陽子江を逆流して目的地に達し，その旅団軍医部を訪れた。その時「ご苦労様」といって黒のサングラスをかけた精悍な軍医大尉の出迎えを受けた。それが若き日の釜洞先生であった。釜洞大尉は稲臣先生に酒と鶏のすき焼きを勧め，胡弓を取り出して中国語で歌を歌ってお聞かせしたという。中国でもやっぱりそうかと私は思った。

釜洞研究室で，私はまさしく疾風怒濤の研究生活を送り，幾多の試練のなかで今日に至る研究実力の基礎を涵養することができた。夢多き時代の，語り尽くせぬ悲喜こもごもの出来事を，今もなつかしく思い出す。